

17世紀フランス王太子の教育にみる古典ラテン喜劇作家の位置づけ

The role of the Latin comic playwrights
in the education of the French princes in the 17th century

榎本 恵子¹

¹大妻女子大学文学部

Keiko Enomoto¹

¹Faculty of Language and Literature, Otsuma Women's University
12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

キーワード：17世紀，フランス，王太子の教育，古典ラテン喜劇作家

Key words：17th century, France, education of Princes, Latin comic playwrights

抄録

王太子グラン・ドーファン（ルイ14世の長男）が古典ラテン喜劇作家プラウトゥスとテレンティウスを読んでいたという事実に多くの研究者たちは驚きと不可解さを提示している。事実、「喜劇の父」であり「ラテン語日常会話の師」と称され評価されているにもかかわらず、古典ラテン喜劇作家の扱いは当時の教育機関によって異なっていた。本稿では、文学、芸術、演劇、建築等の様々な分野でのメセナとして君臨した「偉大なる世紀」17世紀フランスを統治したルイ14世の王太子教育において古典ラテン喜劇作家が重要な位置を占めていたことを調査確認した報告である。

序論

古典ラテン喜劇作家プラウトゥスとテレンティウスは、生きた日常ラテン語の師として評価されていた。フランス17世紀の三大劇作家のひとりモリエールは西洋喜劇の父である古典ラテン喜劇作家プラウトゥスとテレンティウスの再来と称され、ラ・フォンテーヌは彼の死に際し「プラウトゥスとテレンティウス、そしてモリエールもいない」とその才能を惜しんだ。

王太子の家庭教師であり、演劇を厳しく糾弾しているボシュエが王太子グラン・ドーファンにそのテレンティウスを読ませたことが教皇への手紙の中に記されている。1679年、出張中の副家庭教師のユエへの報告の中でもボシュエはグラン・ドーファンがテレンティウスを読んだと書き送っている。しかしこの事実は、研究者たちを驚愕させた。H.ドゥリュオンは解説の中で、生徒の教育に心を砕かなければならない家庭教師であり、手厳しい反演劇論を展開したボシュエが、青少年にふさわしくないテレンティウスの作品を読ませたこ

とは不可解であると言及している。執筆者は博士論文において、この古典ラテン喜劇作家への評価の矛盾を提示し、玉虫色に変化する評価の実態を解明した。今回、戦略的個人研究費の助成を受けて、改めて王太子の教育に焦点を当て、その実態と古典ラテン喜劇作家の位置づけを精査した。

本研究の成果は、首都大学東京人文科学研究科紀要『人文学報』に掲載された[1]。そこで本報告では、上記論文を書くにあたり、今回の研究調査で明らかになったことを、現在では研究者たちの共通の見解となっている当時の環境を整理したうえで、ルイ14世ではなく王太子の教育を扱うことにした理由、ボシュエとユエのマニュスクリ、『王太子のための古典ラテン文集』の三つの観点を紹介し、そこから導き出された結論を提示したい。

17世紀の教育事情からみる古典ラテン喜劇作家の位置づけ

17世紀を代表する教育機関イエズス会のコレ

ジュとポール=ロワイヤルの「小さな学校」における古典ラテン喜劇作家の受容は以下のとおりである[2].

イエズス会のコレージュにおける演劇活動は、未来の聖職者や説教師に不可欠なレトリックを学ぶ格好の活動であると同時に信仰教育であった。芝居を通して説得術を学ぶ、つまり、演じる者の魂の高揚が、観る者の心を揺さぶる力を以て信仰心を高めようというのである。しかし、芝居という虚構の中で、登場人物と共に生々しい感情を分かち合うことが無垢な魂に与える力は危うい諸刃の剣でもある。そこでイエズス会の指導者たちは、商業演劇とは性質の異なる、教育を目的とした新たな演劇を発展させ、プラウトゥスとテレンティウスを排除した。

ポール=ロワイヤルの隠士たちは、聖アウグスティヌスの『神の国』の中ですでに示されている考え方を踏襲し、演劇はむしろ「異教徒たちによる風紀を乱す最たるもの」という認識を持っていた。そして「具現化した悪魔の傑作」あるいは「悪魔に魅入られたもの」として一切の演劇、観劇を禁じていた。一方で善悪の判断をつけるために知識を得ることが必要であるとし、多少道徳的に問題がある異教徒の作品も、不謹慎な部分を修正して生徒に提供していた。テレンティウスの文体は日常語であるが、決して低俗なものに陥ることはなく、ひとたび17世紀の風俗に合うように不穏当箇所を削除してしまえばいい教科書となるとの見解から、読むことを禁じてはいなかった。サシ師のテレンティウスの対訳本『テレンティウス喜劇』(1647)、クロード・ニコルの『幽霊屋敷』(1656)、トマ・ギヨの『新訳 捕虜』(1666)がある。また、1659年に編纂された『風刺名言集』と1669年に編纂された『格言集』には二人の作品の中の名言が数多く収められた。

つまり、イエズス会の学校教育では、聖職者の説教のための修辞学の演習として演劇が奨励されていたが二人の古典ラテン喜劇を読むことは禁じられていた。しかし、演劇活動が一切禁止されていたポール=ロワイヤルの「小さな学校」では二人の作品を学習すべき作家のリストに載せており、古典ラテン喜劇作家はその文体と作品とが同一の評価を得ていなかったのである。

ルイ 14 世ではなくグラン・ドーファンの教育を

扱うことにした理由

1638年9月5日に誕生したルイ14世は、ルイ13世の崩御とともに5歳で即位した。1643年7歳の時に教育が始まったと想定できるものの、正確な記録は残されていない。ルイ13世、王妃アンヌ・ドートリッシュ、リシュリュー、マザランそれぞれの異なる思惑があったこと、フロンドの乱など不穏な状況下、一所に落ち着いて勉強することは難しかった。マザランがこの間の幼いルイ14世の教育に尽力したことは間違いないが、いかなる執筆の記録も残されていない。不規則な教育環境が、反対にルイ14世に臨機応変に対応する術を得ることを余儀なくしたといえるが、国王が長い間、芸術や古典の知識が欠けていたといわれることにも信憑性がある[3]。H.ドゥリュオンが言及するように、息子の誕生によって、国王ルイ14世が青少年期に学ぶべき知識の不足を埋めようという気になったとすれば、息子グラン・ドーファンのための教育に力が入ったと考えられる。

王太子は「養育係」と「家庭教師」のもとで学ぶのが通例であるが、ルイ14世以降、それに副養育係、副家庭教師がついた。軍事面と国王としてあるべき素養、社会道徳を養育するのが「養育係」の仕事であり、「家庭教師」は学問、特に文学的側面を受け持った。子供の精神的側面の成長において、風習、慣用、的確な判断力が身に着くよう教育したのも「家庭教師」である。王太子には養育係は「オネットム」と呼ばれるにふさわしい優れた軍人であり社交界に通じていたモンソーエ侯爵[4]、家庭教師としてボシュエ、副家庭教師にユエがついていた。ユエはヨーロッパ屈指の文学貴公子と呼ばれるほどの知識人である[5]。

ボシュエとユエのマニュスクリ

グラン・ドーファンは1673年、12歳の時にラテン語のテキストを読み始めている。そして最初の作品の中にテレンティウスの『兄弟』がある。次に『自虐者』を読んでいる。家庭教師ボシュエ、副家庭教師にユエのテレンティウスを読んだ証となるマニュスクリがフランス国立図書館に残されていた。ボシュエの手書きノート『王太子の教育のための戯曲 29 選』XXIX *Recueil de pièces pour l'éducation du Dauphin* (sl. sd)とユエが『自虐者』と『宦官』を私訳したノート *Manuscrit de la*

traduction de l'*Eunuque* et de l'*Heautontimorumenos* par Huet (sl. sd) である。前者はフランソワ・ミッテラン館に所蔵され、後者はリシュリュー館古文書学校附属図書館に所蔵されている。

ボシュエの手書きノート『王太子の教育のための戯曲 29 選』には「Argument de l'*Heautontimorumenos* de Térence」が含まれており、ボシュエがテレンティウスを読んでいたことが分かる。ユエの『自虐者』と『宦官』の私訳は完結していないが、グラン・ドーファンに読ませた作品と合致する。双方ともに、正確な年代が記されていないので仮説の域を出ないが、王太子がテレンティウスを読む際の準備と取ることができる。モンソーエ侯爵と親交のあったヘインシウスの版(1618年)はこの時代評価を得ており、彼らが、ヘインシウスの書いた *Dissertation sur le jugement d'Horace au sujet de Plaute et de Térence* [6] を読んでいたと想定できる。ヘインシウスはテレンティウスを高く評価していたので、家庭教師がテレンティウスの作品を王太子に読ませたことの根拠となりうる。

『王太子のための古典ラテン文集』

グラン・ドーファンの養育係モンソーエ侯爵と副家庭教師ユエは、古代から脈々と続く歴史、そしてフランスの歴史を知ること、さらに古代の遺産である文化の造形を深めること、民衆の意思や上に立つ者の義務を知ること、将来フランスを担う者が知る務めであると考え、通常貴族の子息の教育が13歳で終わるのに対し、グラン・ドーファンには更なる教育を推し進めた。そしてラテン語を含めた教養を学ぶために、モンソーエ侯爵はユエとともに、グラン・ドーファンのための『古典ラテン文集』を企画した。

古典ラテン喜劇作家のうち最初に編集されたのは1675年のテレンティウスで現存の6作品が収められている。王立印刷所業者のフレデリック・レオナルドは、テレンティウスをこのコレクションに入れたのは王太子が好きな作家であるからだと言及している。そしてテレンティウスの作品を評価し、序文には国王ルイ14世が、息子の教育のためにモンソーエ侯爵に依頼して実現した教育目的のコレクションであると書かれている[7]。

4年後プラウトゥスが編集された。2巻、全20作品所収されている。印刷業者は同じくフレデリ

ック・レオナルドである。細かい注釈が付けられており、削除された部分に関してはすべてではないが巻の終わりにまとめられている。

王太子に宛てられた献辞と序文には、プラウトゥスの作品が喜劇作品として価値があるだけでなく、ラテン語と表現の豊かさによって学ぶことが沢山あることが綴られている。そしてプラウトゥスの作品が市民の生活や考えを映し出したものであり、これらを知ることは一国の主として心得なければならない知識であると、古今変わらず上に立つ者の持つべき自覚を説いている[8]。

テレンティウスとプラウトゥスだけでなく、不穏当箇所を削除及び変更された作家はおおよそ収録された作家の4分の1を占める。これらの措置は「王太子の心の純粋さと平穩を乱さないため」であり、それでも成長した王太子が後に全文を知ることができるよう削除した部分をやはり巻の最後に載せている。

コレクションの名前 *Ad usum Delphini* は、辞書には「ルイ14世が王太子のために編纂させた『古典ラテン文集』」とあるが、続いて「不穏当箇所を削除した、気の抜けたような」という意味が載せられている[9]。現在では皮肉のニュアンスを含む熟語として定着してしまっていたが、それは、このコレクションに収められている作品が不穏当箇所を削除してでもグラン・ドーファンのために準備された価値ある作品であることを物語っている。

結論 王太子の教育における古典ラテン喜劇作家の位置づけ

ボシュエの研究者 H.ドゥリュオン、『王太子のための古典ラテン文集』の研究者 C. ヴォルピラック=オジェらは、グラン・ドーファンの教育プログラムの中にテレンティウスとプラウトゥスが含まれていることを疑問視していた。青少年の教育に携わり彼らのためのプログラムを考えた指導者たちが青少年の道徳や倫理教育の観点からその扱いを悩んできたのは事実である。けれども、彼らはこれらの作品の価値を理解していた。そして現在われわれは、それらの作品を読むとき、不穏当箇所があったとしてもその文体と社会を写しだした生き生きとした内容にその価値を見出すことができる。そして笑いの中に教訓が含まれていることを読み取ることができる。プラウトゥスの作品の解説には、削除された箇所や言葉があるのはプラ

ウトゥスのせいではなく喜劇が持つ宿命であること、なぜなら登場人物は自分の身分や性格に合った言葉を使わなければならないからだとある[10]。これはホラティウスが説く喜劇の登場人物の描き方であり、またルキウス・リウィウス・アンドロニクスがいう喜劇の定義に即したものである。

P. モルニッシュは「グラン・ドーファンの『学事規定』はイエズス会のコレージュやオラトリオ会のそれより規制が甘いようだ。またポール＝ロワイヤルの学習法に類似している[11]」と言及しているが、未来のフランスを担う王太子の教育は、そのような規定を超越したところにあるといえないだろうか。ポール＝ロワイヤルとイエズス会に近いモンテジエ侯爵、ボシュエ、ユエがグラン・ドーファンの養育係と家庭教師だったのだから、王太子の教育がそれぞれの教育理念を融合したものであり、開かれているはずの知識の入口がそれぞれの理念によって半分閉じられていたのが「王太子のため」という名目で取り払われたのだ。そして、この古典ラテン喜劇作家はここに名実ともに「喜劇の父」であり「ラテン語日常会話の師」であったといえることができるだろう。

付記

本研究は平成 28 年度大妻女子大学戦略的個人研究費（S2813）の助成を受けたものである。

引用文献

[1] 『王太子のための古典ラテン文集』に見るプラウトゥスとテレンティウスの価値』『人文学報』2017 年, No.513-15, p. 377-402.

[2] 『ラテン語日常会話の師』、プラウトゥスとテレンティウスーポール＝ロワイヤルの『小さい学校』におけるラテン語教育の中でー』『人文学報』2015 年, No.511, p. 229-250.

[3] H. Druon, *Histoire de l'éducation des princes dans la maison des Bourbons de France. Tome premier. Henri IV, Louis XIII, Gaston d'Orléans, Louis XIV, Philippe d'Orléans (Monsieur), Le Grand Dauphin, Paris, P. Lethielleux, libraire-éditeur, 1897, p. 137 et sq.*

[4] P. Mormiche, *Devenir prince, L'école du pouvoir en France, XVII^e – XVIII^e siècles*, CNRS éditions, [2013], 2015, p. 64-67.

[5] C. Volpilhac-Auger, *La collection Ad usum Delphini, L'Antiquité au miroir du Grand Siècle*, sous la dir. de Catherine Volpilhac-Auger, ellug, 2000, p. 35.

[6] Emmanuel Bury, « Comédie et science des mœurs : le modèle de Térence », *L'Esthétique de la comédie, Littératures classiques*, n°27, 1996, p. 126.

[7] *La collection Ad usum Delphini*, vol. II, sous la dir. de M. Furno, 2005, p. 56.

[8] Le commentaire sur les œuvres de Plaute a été fait par M. Scialuga, *La collection Ad usum Delphini, vol. II, op. cit.*, p. 172.

[9] 最初に *Ad usum Delphini* を載せた辞書は『ラルース大辞典』*Grand Larousse de la langue française* (1971)である。

[10] Le commentaire sur les œuvres de Plaute a été fait par M. Scialuga, *op. cit.*, p. 172.

[11] P. Mormiche, *op. cit.*, p. 305.

(受付日 : 2018 年 5 月 2 日, 受理日 : 2018 年 6 月 14 日)

榎本 恵子（えのもと けいこ）

現職：大妻女子大学文学部コミュニケーション文化学科専任講師

パリ第4（パリ＝ソルボンヌ）大学フランス文学・比較文学科博士過程修了（博士，文学）

専門はフランス17世紀演劇。現在フランス17世紀喜劇，ヴェルサイユの祝祭，ルイ14世のイメージ製作に関する研究を行っている。

主な著書：『毎日1文 筆記体でフランス語』（単著，白水社），『混沌と秩序－フランス十七世紀演劇の諸相』（共著，中央大学人文科学研究所研究叢書60号），『フランス17世紀演劇事典』（分担執筆，中央公論新社）